

これはちよつとばかり、しくじったかな。

目の前でうごめく魔女の醜悪な姿を見据えながら、佐倉杏子は自分の失敗を鼻で笑った。

吹き飛ばされ、手の届かない距離に落ちて魔力で維持しきれなくなった槍が煙となって消えていく

「痛いな、もう……」

脚を絡め取った魔女の触手が杏子を引っ張り上げて逆さ吊りにする。天地が逆さまになった視界の中でうごめく魔女を杏子にはらむ。

杏子の声に反応したのか、魔女の本体が複雑に色合いを変え、胴体とおぼしき部分に横一線の切れ目が入り、口を開けたそこから出てきた筒状の物体が捕まったままの杏子へゆっくりと近づいていく。

筒の内部では、機械とも生物ともつかない歯車のようなものがみっしりと並んでいる。不規則に魔女から伸びる筒の中から、歯車上の物体がきしむ音を載せて生暖かい風が杏子へ吹きつける。

「あたしの身体に触れるとは、魔女にしてはなかなかやるじゃん。ま、もうすぐ死ぬけどね」

自分を飲み込もうと近づいてくる魔女の触手に向かい、逆さ吊りにされながら杏子は不敵な笑み向ける。身体の前、なにも

ないところへ伸ばした左手へ赤い光の粒子が集まり槍の形を取る。杏子は一振りで自分の足をつかむ魔女の触手を切り落とそうと――

「いま助けてあげるから、ちよつとだけ辛抱してね!!」

突然に響いた声に杏子が思わず目を見開くと同時に、視界の中に自分より少し年上なくらいに見える少女が長大な銃を構えながら飛び込んでくる。着地と同時に手に持つのと同じ長大な銃が少女の周囲に次々に現れ、少女はそれらを連続で魔女に向かって射撃する。

頭の芯に響く奇怪な音を発しながら魔女が身悶えする。振り向いて杏子へウイंकを飛ばすと、少女は胸元のリボンを引き抜いて宙にかざす。

「これでとどめよ……っ!!」

宙を舞うリボンが体積を増し、一瞬のうちに巨大な大砲を形作る。芝居がかったそぶりですら空中へ飛び上がった少女は軽々と大砲を構える。

「ティロ・ファイナーレ!!」

大砲から放たれた巨大な光の弾が魔女をつらぬく。胴体に大きな穴を空けられた魔女が動きを止め、枯れ葉を散らすように

小さな破片に分かれて崩れてゆく。触手が消えたことで、身体を支えるものの無くなった杏子は受け身を取る間もなく頭から地面に落下して転がる。

「危なかったわね。もう大丈夫よ。身体に怪我はない?」

魔法の消滅と同時に結界が消え、揺らぎながら元の街の風景が戻ってくる。奇妙な衣装に身を包んだ少女は、尻餅をついたままの杏子に向かって笑いかける。

「もう怖がらなくてもいいのよ。ほら、立ちなさい」

耳の後ろで二つに結った明るい色の髪をカールさせ、現実離れた華美な服装に身を包む少女が手を差し出す。手を取って立ち上がらせられながら、杏子は少女の姿をまじまじと見つめる。

「いきなりこんなことに巻き込まれてびっくりしたでしょう?」

あれは魔法って言うて——」

なおも話しかけてくる少女をよそに、ひとつ息を吐くと同時に杏子は変身を解く。全身を包んでいた魔法少女の装束が赤い光にほどけて集まり、手のひらの上でソウルジェムの形をとる。声を出せないくらい驚いている少女をよそに、変身前に服のポケットに入れていた菓子の箱を取り出して封を切る。

袋から一本取り出した菓子を口にしながら、杏子は少女に笑いかける。

「もしかして、あんたも魔法少女かい?」

「魔法少女が私のほかに居たなんて聞いてないわよ!!」

「マミはこれまで、そんなことボクに確認しなかっただろう?」
怒りを込めてキュウベえへ食つてかかる少女を、杏子はホコリひとつ無いガラステーブルにほおづえをついて眺める。

杏子を救ってくれた魔法少女はバマミと名乗った。たまたま現場がマミの家のすぐ近くだったと言うことで、強く誘うマミに連れられて杏子はマミの家を訪れていた。決め手になったのは、家にはたくさんお菓子があるというマミの言葉だ。

目の前にはマミが用意してくれたケーキの皿がある。キュウベえをにらみつけるマミをよそに、杏子は自分の前に置かれたケーキをフォークで突き崩す。

確かにマミの家に用意されていた洋菓子類は素晴らしかった。アルバイト店員相手だと魔法を使って強制的に言うことをきかせやすいから、ここしばらくコンビニのお菓子ばかり食べていた身には新鮮だった。

だけど、こんな騒ぎに巻き込まれるのはごめんだ。

「つまりは私や、その佐倉さんみたいな娘がもつとたくさん居るってこと?」

「もちろんそうだよ。マミは魔法少女を自分だけの特別な何かのように思つてみたいけど、ボクからするとそれは大きな勘違いだよ」

キュウベえ。いまいましい魔法の使者。したり顔でマミと会話

話しているその白い姿を前にしては、とびきりのケーキも美味しくない。

「佐倉杏子。君は自分以外にも魔法少女が居ることを知っていたらどう？」

「……ああ、そりゃもちろんさ。今までに何人も会ってきてるからね」

「ママとでは会話にならないと感じたのか、キュウベえが話を振ってくる。おきなりに答え、杏子はフォークでつつきすぎてだぶ崩れてきたケーキを口に運ぶ。」

「佐倉さん、それなら他の魔法少女の娘に連絡を取ったり出来る？ みんなで一緒に戦えたら——」

「はあ？」

「ケーキを口に入れたまま、杏子はあっけにとられてママを見返した。他の魔法少女に連絡を取る？」

魔法少女は限られたグリーンフィールドを取り合うライバル同士だ。杏子が契約したのは十一歳の時だから一人きりの戦いを続けてもう四年近くになるけれど、成り行きでの一時的な共闘こそあれ協力関係などついぞ築いたことはないし、持ちかけたこともない。

いまこうしてママの部屋に招かれているのも、先ほどの戦いで一度助けられているからだ。これだけ美味しいケーキがあるのならまた来てもいいとは少しだけ思っていたけれど。

「助け合えばもつと楽に戦えるわ。みんな、この街を守りま

しょう」

驚きのあまり杏子は口の中のケーキを飲み込むことすら出来ない。その沈黙を同意と受け取ったのか、ママがさらに続ける。

「自分しかいないと思っていたけれど、他にも仲間が居たなんて……こんなに嬉しい事ってひさしぶり」

「さすがのようなママの言葉。それに、ようやくケーキを飲み込んだ杏子は無言で首を振った。」

魔法少女なんて、そんないいものじゃない。

「他の魔法少女に連絡を取れないの？ それなら佐倉さん、あなたも？ あなただけでもいいから、わたしと一緒に戦ってくれない？」

「なんであたしが、あんたと一緒に戦わなきゃいけないわけ？」

「私たちは魔法少女なのよ。みんなを守るためには、二人でいっしょに戦ったほうがいいに決まってるじゃない」

にじり寄ってきたママが杏子の手を取る。その背中越しに、窓際のソファアの上に表情を変えず無言でたすむ座ったキュウベえが見える。

「佐倉さん？」

何も答えない杏子の手を握ったまま、ママが不安げに尋ねる。魔法少女と言うだけで仲間意識を感じてでもいるのだろうか、あまりにも無警戒なママの様子に杏子は哀れみすら感じる。

みんなを助けるなんてお題目を唱える魔法少女に会うのは初めてだった。まさかママは、騙そうとしているなどではなく心

底からそんなことを信じているのだろうか。

「あんた、いつ魔法少女になったんだ？」

「え？ ああ、それなら一昨年の秋からよ。小学六年生のときだけ……」

「なら、キャリアは二年ちよつとか」

魔法少女として契約を結ぶのは中学生くらいが一番多い。他の魔法少女たちと比べれば杏子はかなり早いほうだ。だからマミも、契約したばかりの勘違いしたルーキーかと思っていた。

だが、実際は自分の方がほんの少し先輩なだけだ。だからこそ夢見るようなマミの発言が気に障る。

「じゃあ、佐倉さんはいつから魔法少女をやってるの？」

「三年前からだよ。いまは十四歳、あんたと同じ年」

天涯孤独の身になったあの日から学校には行っていない。そもそも今の自分の戸籍がどうなっているのかも判らないし、気にしたこともない。もしかしたら、もう死んでいることになっているのかもしれない。そう思うと、中学二年とは言いたくなかった。

「同じ年って、なんて素敵な偶然なのかしら。やつぱり私たちは一緒に戦う運命なのよ！」

同じ年と言うところにやたら反応したマミが満面に笑みをたえて杏子に迫る。まさかそこに反応してくると思わず、杏子は自分の愚かさを呪う。

「ねえ佐倉さん、私と一緒に——」

さすがにもう、付き合いきれない。

「じゃ、あたしはそろそろ帰るから。ケーキ、美味しかったよ」

「佐倉さん、まだ話は終わってないわ!!」

マミの手をふりほどいて立ち上がると、杏子は玄関に向かつて足を進める。背中に呼びかけるマミの声を貸さず、ドアを開けマンションの廊下に出た杏子の髪を吹きつけた夜風が揺らす。

もうすぐ本格的な冬がやってくる。寒さに凍えながら夜の魔女捜しはおつくうだ。魔法少女なのだから、いつそ魔法で寒さをしのぐことは出来ないのだろうか。

とりとめのない思考をもてあそびながら小綺麗なマンションの廊下を進む。

「待つて!! 佐倉さん……」

玄関から飛び出してきたマミが声を上げる。振り向かないまま片手を上げて別れを告げ、杏子はエレベーターに乗り込んだ。

「なんなのさ、あいつは」

マンションの入口ロビーへ向かって降りてゆくエレベーターの中で、壁に背中を付けて天井を見上げる。汚れひとつ無い照明が眩しい。

魔法少女の身体能力なら、マミの部屋の高さから地面まで一気に飛び降りることだって出来る。気取ってエレベーターに乗ってしまったけれど、先回りしたマミが待ち受けていたりしたらどうしようか。

「……そんな事できる娘じゃないか」

自分なら必要とあらばいつでも魔法少女の能力を使っている。それが、魔法少女として生きるという事だ。

だが巴マミは、日常生活で魔法を使うようなタイプには見えなかった。どうやら彼女は心の底から正義の魔法少女という存在を信じているようだ。最初は新人にありがちな勘違いかと思っただけ、それともまた雰囲気が違う。

いったい何を契約の願いにしたら、あんな風になるのやら。

「みんなを守る、ね……」

契約したばかりの頃の記憶がふと蘇る。杏子がため息をつくと同時に、エレベーターのチャイムが一階へ到達したことを告げる。

マンションのエントランスホールを出た杏子は、口寂しさを紛らわそうと上着のポケットを漁る。

「あれ、落としましたか」

ポケットの中に菓子が見あたらないことに気づいた杏子は顔をしかめる。きつとマミの部屋に落ちてきてしまったのだらう。

忘れ物を取りにもう一度戻るなど論外だ。目についた道端のコンビニエンスストアに入り、スナック菓子を小脇に抱える。「ありがとございましてー!!」

店員と店内にいた客に軽く魔法をかけると、商品をレジに通さぬまま店内から出て行く杏子に店員が大きな声で挨拶する。

一人きりの生活をはじめたばかりの頃はうまく魔法が効かなくて万引きで捕まったこともあった。あまりにも繰り返すのでコンビニやスーパーマーケットでマークされ、おかげでほとぼりを冷ますために二年ほどこの見滝原から離れた郊外の町へ出るハメにまでなった。

でも、いまはこの通りだ。

「魔法なんて、自分のためだけに使えばいいのさ」

包装紙を勢いよく開けて手をつこみ、取り出したポテトチップを口の中に放り込む。

ろくに味わいもせずにかみ砕くと、慣れ親しんだ塩辛さが口の中を満たす。ポテトチップを飲み込みながら、杏子は左手の薬指にはまった魔法少女の証の指輪を撫でた。

*

「佐倉さん、危ない!!」

目の前をふさぐ使い魔達が次々とはじけ飛ぶ。なぎ払おうと構えていた槍を下ろし、ため息をつきながら杏子は振り向く。

「あのさあ、なんのつもり？ あたしは一言も助けてくれなんて言っていないんだけど」

「魔法少女同士、助け合わなくちゃ。せつかく同じ魔法を倒そ